

相互価値共創のスパイラルアップによる新しい価値の創出
 「京急グループが進める「沿線価値共創戦略」」

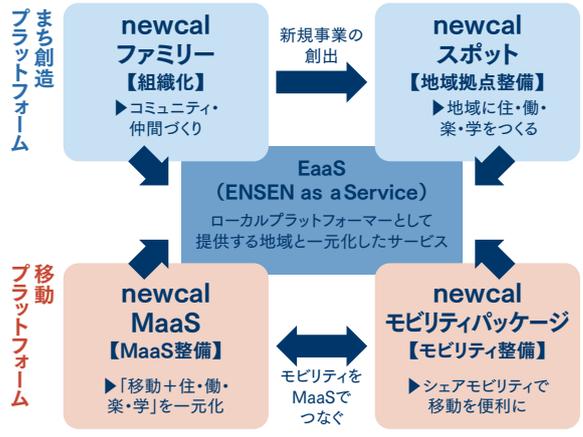
REPORT.4

地域との協働により 新しい価値を生み出す 京急沿線 エリアマネジメントの 取り組み

都心から首都圏南部を結ぶ京浜急行電鉄では、ビジネス・商業地域から自然豊かな住宅・レジャー地域まで、さまざまな特色をもつ沿線地域において、地域住民、自治体、教育機関とともに地域の新しい価値を共創する活動を推進している。新しい価値共創室長の杉山勲取締役常務執行役員に詳しい話を聞いた。

取材・文◎清水友樹／撮影◎織本知之／写真画像提供◎京浜急行電鉄株式会社

■newcalを支える4要素



■みさきまぐろきっぷ



食事、施設利用、お土産などがおとく楽しめる「みさきまぐろきっぷ」のデジタルきっぷ画面(左)と三崎名物まぐろ丼(右)。

新しいまちづくりのコンセプト

京急が目指す「移動」と「まち創造」の二つのプラットフォームのスパイラルアップの実現を支えるのが、京急沿線エリアマネジメント構想「newcalプロジェクト(以下、newcal)」だ。「ニュー・ローカル」を意味し、「新しいカルチャーを生み出す」という想いも込められている。

「黙っていても鉄道利用者が増える時代ではありません。長期的には非鉄道の底上げを高めることで、まち創成の底上げを目指すなかで、「まち創成事業」の重要度は増えています。これまでは「まち」の魅力を掘り起こすという発想は希薄だったかもしれませんが。だからこそ、沿線に魅力的なまちをつくることで、『京急に乗ってあのまちへ行こう』という新しい人の流れを生み出したい」と語るのは、このプロジェクトを率いる新しい価値共創室長の杉山勲取締役常務執行役員だ。

従来、「住む」家と、「働く」会社と「学ぶ」学校との二拠点移動を前提として鉄道事業を考えていた。しかし、それだけでは利用者が減る趨勢に抗えない。そこで京急は、「楽しむ」要素を加えた魅力的な中核拠点をつくり、地域の移動手段をシームレスにつなげて「移動」の利便性を高めることで、中核拠点間移動の活性化を目指す。「楽しむ」とは、レジャーやイベント、大規模商業施設だけではない。そ



取締役 常務執行役員
 新しい価値共創室長
杉山勲
 Isao SUGIYAMA

こに行きたくなるような街並みや自然、会いに行きたくなるような魅力的な人々など、さまざまな魅力を含む。従来は鉄道事業に重心を置いていたため、「移動プラットフォーム」起点の施策に対して、「まち創造プラットフォーム」側が合わせるが多かった。しかし、それを考えるきっかけになった取り組みがあった。それが2009年度に販売を開始した「みさきまぐろきっぷ」だ。切符とまぐろ料理などが楽しめる食事券、現地での体験が楽しめる施設利用券をセットにしたこの商品は、ピーク時には年間20万人以上利用されており、「京急にしかできないこと」で地域に賑わいをもたらしている。地元の協力なくして実現できない、この商品の成功はエリアマネジメントを考えるうえでの原点になり、newcalのヒントになった。

そして三浦から始まった地域との協力は、newcalというかたちで、「おおた」、「横浜」、「川崎」、「かなざわ」に広がり、8月には「上大岡」が追加された。2024年度中には「品川」も追加される予定だ。

【京急グループが進める「沿線価値共創戦略」】

newcalの実施事例

神奈川大学、川崎市と開催した「春の盛り盛り親子フェスタ」(2023年4月)(右)、川崎祭り実行委員会と開催した「川崎ビール祭り」(2024年8月)(左)。

2024年8月に屏風浦駅前にオープンした地域交流スペース「屏風浦つながるステーションB」。

三浦・三崎にきた観光客が海岸沿いをサイクリングできる「みうらレンタサイクル」は、モビリティパッケージの一つ。

2022年12月に金沢文庫駅前にオープンしたカフェスペース「よみみちガーデン」。

2023年5～7月中の3日間、大田区と連携した「移動式子ども食堂」ではフードトラックで料理を無料で提供した。

横浜市と共同開催した「こどもまんなか京急沿線フェスタ」(2024年2月)(上)と「おかまちリビング」(2024年2月)(下)の様子。

newcalを支える4要素

newcalは、「組織化」「地域拠点整備」「Maas整備」「モビリティ整備」という4つの共創活動で構成される。newcalをより理解するためには、この4つの共創活動を知る必要がある。

「組織化 (newcalファミリ)」は、地域の「場づくり」「仲間づくり」を行う仕組みだ。各エリアで、京急グループを中心に地域事業者、自治体、教育機関、スタートアップなどが参加する「newcalファミリ」を組織化。そこで地域活性化につながる化学反応が起きることが期待されている。

「地域拠点整備 (newcalスポット)」は、地域活性化のアイデアを具体化して、「住・働・楽・学」の地域拠点の整備を目指す。例えば、古民家の所有者とそれをホテルとして活用したい起業家をマッチングさせて新たな拠点を生み出す——といった取り組みだ。

「Maas 整備 (newcal Maas)」は、地域共通の予約決済基盤構築、デジタルきっぷ導入などを行う。

そして、「モビリティ整備 (newcalモビリティパッケージ)」は、鉄道やバス、タクシーといった移動手段にシェアサイクル、EVカーシェアなどを組み合わせて、エリア内の移動をより便利にするを目指す。

これらをデジタル基盤とともに一元化してサービスを提供することを、京急グループは「EaaS (イアース、

ENSEN as a Service)」と呼んでいる。

「組織化」「地域拠点整備」は、「まち創造プラットフォーム」を、「Maas整備」「モビリティ整備」は「移動プラットフォーム」を支える共創活動になっている。つまり、この4つの共創活動が有機的に結びついて機能すれば、「相互価値共創のスパイラルアップ」は実現されるということだ。

「私たちがだけではない」とは限りがあります。将来的にはエリア内つながりの中から、自然発生的にさまざまな活動が生まれる——それが理想の姿です。私たちはその動きを起こすための種火でしかありません」と杉山常務が語るように、newcalは、単なる拠点づくりをするだけではない。京急グループを含めた沿線地域全体の意識変革を促す取り組みでもある。

京急沿線のまちは変わろうと胎動を始めている。例えば、平和島駅周辺では改良工事に際し、地域住民や自治体との連携を強化。地域の声を反映した駅周辺の再開発や商業施設の整備を進めている。この他にもnewcalの各拠点で、住民や事業者の連携強化を促すイベントの開催や新しいまちづくりを進めるためのプロジェクトが立ち上がっているという。こうした取り組みを推進するため、新しい価値共創室で地域の賑わいを定量的に評価する指標を策定した。具体的な目標を設定することで、多極型まちづくりをさらに加速させていく考えだ。